

コンピュータのソフトは事務系、制御系、技術計算のほかにゲームやキャドなど多岐にたっている。そしてソフトを作る開発言語やデータベースもそれぞれ用途に合うものが開発されている。インターネットを使う環境になってセキュリティが重要になると、その機能を持つ言語やデータベースが開発され、その時の主流になったりする。それはさながら生命の進化過程のように多様に発展している。

反面、通常ソフトといわれる業務アプリケーションは永年にわたり人類が築いてきた知恵の原則に基づいて作られる。例えば、事務系のソフトであればそれは会計学の原則に則って設計される。会計は報告会計と管理会計に分類されているが、コンピュータのソフトではそれは勘定系・情報系として分類されている。そして、システムの設計においてそのデータの入力方法や数値の更新のタイミングが検討される。それらは最終的には会計のシステムに流れて行くように設計される。この会計が何を目的に作られているのかを知らなければ事務系のシステムは作れない。しかし、日本の学校では中学でも、高校でも会計学を教えていない。これは、複式簿記を意識的に使わない公務員に原因があると思う。

平成十二年十月に南紀白浜のゴルフ場からデモ依頼があった。一人で説明も出来るようになっていたので一人で出かけた。三十年振りの南紀旅行を楽しみたかった。

大学生の二年の時、教授が企画する文学バス旅行に出れば単位が取れると言う結構有名な教授がいた。かなりの高額な旅費であったが無理して参加した。それに出ないと単位がたらないので三年生に進級できなかつた。一年生の時は体育会の剣道部に所属した。高校の先輩が何人かいたので高校の延長のような気持ちで入部したが、四百人も部員がいるので先輩の顔すら見つからない。朝はやい体育の単位は免除になるがプロになるのかと思うほど練習をする。これでは何も出来ないからと一年で退部した。そしてアルバイトを始めると遊びが多くなって学校には出なくなる。ごく一般的な学生生活がはじまっていた。

バス一台に四、五十人の男子学生が乗り、伊勢から尾鷲、那智、紀三井寺、高野山と三泊位いで冬の南紀をまわった。高速道路がまだ出来ていなかった時代だったので遠い、長いバス旅行だった記憶がある。しかし、医学部や工学部の学生の参加が多く、彼らとの交流が大学時代の貴重な思い出でもある。また、道成寺の安珍・清姫の話など、教授がその土地土地に関わる文学の話をしてくれたのも印象に残っている。

なによりもその現場にいったって見てみるのが、理解や問題解決には一番の近道になると言うことを初めて実感した旅であったと思っっている。

南紀白浜の神島にある「南方熊楠記念館」に行きたいと思っていた。その機会が転がり込んできたのである。

南方熊楠をインターネットで検索して調べると、先ず「歩く百科辞典」と書いてあるが、この表現は適切ではないと思う。また、狂気の人と思われているとも言われるがこれにも反対したい。民俗学者の柳田國男に「自分は狂気の気があるので学問研究に集中して、正常に繋ぎ止めている」と書簡の中で告白しているとさていれるがそれはジョークのつもりだったのではないだろうか。

大英博物館の東洋部長やアメリカでの研究など十四年に及ぶ海外での活動後、郷里の熊野に住み、粘菌の研究や民俗学、自然科学、宗教哲学などに精通した博物学の巨星は、自然界の森羅万象の現象を観察し、必然性と偶然性を同時にとらえる「因縁」の理論から独自の宇宙論「南方曼陀羅」を確立している。山奥で研究に集中し狂気の人に見えた南方熊楠の姿は四国の山中で修行した真言密教の空海の姿ではないだろうか。南方熊楠は空海の頭脳が輪廻し、文明開化の日本に未来を示すために現れた人だったと思うのである。

南方熊楠記念博物館は白浜のコブのような半島の根元にある。紺碧の海を隔て熊楠がその自然保護を運動した神島が目の前にある。館内には熊楠が世界中で集めた鉱石や標本がところ狭しと並べられている。

そして、子供の落書きのように簡単に描かれた「南方曼陀羅」があつた。

それは、宇宙の森羅万象が陰陽の法則、電子のプラスとマイナスにより構成されている事を現しているようでもある。地表の珊瑚といわれる粘菌の観察により、植物と動物の境界にある原理を見続け、それまで集めた膨大な情報・知識を駆使して分類をすることによりこの曼陀羅が生まれたのである。

プログラマーの教育課程で最初にするのは二進法の計算である。機械語と呼ばれるコンピュータが認識できる言語は0と1の羅列である。この電子のプラスかマイナスかはビットと呼ばれる。電子八個の組み合わせで一文字を現す二五六通りの文字が表現することが出来る。この八ビットが一バイトと呼ばれる。だから一キロバイトは千文字、一メガバイトは百万文字、一ギガバイトは十億文字を記録することが出来る。

ソフトの仕事をして気づいたことは、このゼロと一の組み合わせで人が考える全ての事が出来てしまうことである。百万円で契約して作成したソフトを納入すると、しばらくして「こんな機能を追加出来ないか」と話がある。担当SEが面倒になって出来ませんと答えると大変なことになる。なぜなら、それは出来るのである。「契約金額の開発範囲では出来ません」が正しい答えなのである。

それにしても神様はアラブの砂漠に石油を埋蔵したり、コンピュータやインターネットの出現の前に南方熊楠を世に出したり不思議なことをするものだ。十六年九月記